

技能実習生に向けられた日本語母語話者の文末表現の特徴

—— 鉄骨工場における作業現場のデータと講習用教材との比較から ——

The feature of the sentence end expressions in Japanese native speakers' utterances toward technical trainees: Comparison of work site data from steel factory and training materials

張 学 盼*

ZHANG Xuepan

(要旨)

先行研究では、技能実習生に関する日本語教育の問題点の1つとして、講習で教えられている日本語が作業現場で使われている日本語と相違していると指摘されている。しかし、具体的にどのような点で相違しているのかということについては明らかにされていない。技能実習生が作業現場で日本人の同僚からの指示を理解するためには、日本語の統語構造の特徴から、文末表現を理解することが欠かせないと考えられる。日本語の文末表現には、「発話の機能」を明示的に示す働きがある。命令か依頼かが文末表現を聞いて初めてわかるからである。そこで、本稿は鉄骨工場のような指示が多い作業現場をフィールドとし、そこで、技能実習生に向けられた日本語母語話者の発話における文末表現の特徴を明らかにした。そのうえで、そこで明らかになった特徴と技能実習生向けの講習用教材の比較を通し、両者の、文末表現上の相違点を析出することを試みた。

研究結果として、1) 作業現場の発話には、言いさが半数近くあり、よく使われているのに対し、講習用教材では、言い切りが主導的な地位を占めていること、2) 作業現場では、普通体を主基調として、発話が進められているのに対し、講習用教材では、丁寧体を主使用文体としていること、3) 作業現場では、「動詞等の〇形」の使用率は3分の1に足りないのに対し、講習用教材では「動詞等の〇形」の使用率は半数近くあること、4) 作業現場では、相応の縮約形があるものについては、縮約形を使うのが一般的であるのに対し、講習用教材では、ほとんどの場合に、相応の縮約形があったとしても、元の形そのまま使われていることが明らかになった。このような状況を踏まえ、今後、講習において、作業現場で働く日本語母語話者の発話の文末表現をどのように導入し、教えたらいいいのかについて、工夫が必要であると思われる。

キーワード 技能実習生 日本語母語話者 作業現場 講習用教材 文末表現

1 問いの設定

2017年11月1日に施行された「外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の母語に関する法律（技能実習法）」では、技能実習期間が最長5年間に延長された。それとともに

に、来日後の技能実習生に対する日本語教育はさらに注目を浴び、焦眉の課題になった。その一因として、彼ら（技能実習生）の大半は日本語の初心者であり、しかも、来日後、原則2か月間の講習を受けた後、すぐ作業現場に身を投じ、実習を始め、勤務外で日本語

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程2年 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

を学習する時間がほとんどないということが挙げられる。しかし、日本語で日本語母語話者と十分な意思疎通ができなければ、技能実習生と受け入れ側双方に不利益がもたらされる可能性が高い。これは、溶接や切断等、危険性を伴う作業に従事する現場においては、なおさらだと考えられる。

しかし、技能実習生と日本語母語話者のコミュニケーションに関する研究は十分に成されているとは言えない（飯田2020：32）。日本語母語話者が考える技能実習生にとっての日本語の「わかりやすさ」と、技能実習生にとっての日本語の「わかりやすさ」には、すれ違いや差異が存在する可能性がある（飯田2020：34）し、（技能実習生向けの）講習で教えられている日本語と作業現場で使われている日本語とは相違していることも指摘されている（赤塚2008：151、153、修・浅野2001：194、198）。これらのことを踏まえ、作業現場で実習を行っている技能実習生とそこで働いている日本語母語話者とのコミュニケーションに注目し、そこでの日本語と講習での日本語にはどのような相違点があるのかを明らかにする必要があると思われる。

技能実習生と日本語母語話者との、円滑なコミュニケーションの実現可能性について考察するために、注目せざるをえない点の1つとして、文末表現が挙げられる。日本語はSOV（Sは主語名詞句、Oは目的語名詞句、Vは動詞句である）タイプの統語構造で、述語は文の後ろに置かれるという特徴があるため、「表現者のさまざまな表現意識や表現意図は、文表現の後方へ後方へと持ちこされ」（中西1992:99）る。つまり「文末決定性」（藤原1982）を持つ。同時に、日本語の文末表現は、「発話の機能」を明示的に示す働きがある。例えば、その発話が、単なる陳述文なのか、命令・要求・依頼や助言、謝罪などの行為を

要求するような発話なのかは、文末表現を聞いて初めてわかるということが多い。そのため、学習者にとっては、命題だけの表現の習得よりも、このような文末表現を適切に理解することのほうが難しいということが指摘されている（池田1995：128-129、水谷2001：106）。

以上のように、日本語の文末表現が理解できないと、話し手の発話意図を把握しにくい。とりわけ、SOVタイプの統語構造である日本語が中国語、英語、ベトナム語等のような、SVOタイプの統語構造となっている言語を母語とする学習者にとって、習得上の困難さを増すだろう。これ（日本語の文末表現の習得上の難しさ）は日本語初級レベルの技能実習生にとっては、なおさらだと考えられる。また、日本に滞在する技能実習生の国籍別の割合からみると、上位3か国ベトナム（38.6%）、中国（35.4%）、フィリピン（9.9%）（法務省2016）のどの国語・公用語¹もSVOタイプの統語構造となっている。そのため、日本語の文末表現の特徴を明らかにするのは、社会的な意義もあると考えられるだろう。そこで、本稿は、鉄骨工場のような指示が多い作業現場をフィールドとし、そこでの、技能実習生に向けられた日本語母語話者の発話における文末表現の特徴を明らかにする。そのうえで、そこで明らかになった特徴と技能実習生向けの講習用教材の比較を通し、差異があるかどうか、ある場合はどのような違いがあるのかを明らかにしたい。それが本稿の目的である。

2 先行研究

2.1 技能実習生への日本語教育について

従来、技能実習生に関する研究は主として、彼らをめぐる社会問題に焦点を当ててお

り（たとえば、外国人技能実習生問題弁護士連絡会2018、多賀谷2016）、技能実習生にかかわる日本語教育・学習／習得の研究は管見の限りそれほど多くはない。その中で、講習及び作業現場に視点を置いたものとして、赤塚（2008）、佟・浅野（2001）が挙げられる。

赤塚（2008）は、日本語学習に関する現状の問題点を学習者、日本語指導者、受け入れ企業といった3つの立場から、日常の実践を通して捉えている。その結果、1）学習者から：作業現場と講習で学んだ日本語と相違している、2）日本語指導者から：講習で行ったテストの評価の読み取りが作業現場の要求する日本語と結びつかない、3）受け入れ企業から：作業現場で求める日本語と机上の学習とはかけ離れたものがあると述べている。そのため、1）受け入れ企業側にとっては、筆記テストの得点の高低にかかわらず、意思伝達の可能な能力が育成されていけばよいわけであること、2）作業現場における日本語は入門、初級、中級、上級と順を追って学習していけるものではなく、レベルに関係なく、作業に関する専門用語、関連用語、表現等の導入が必要になってくること等を主張している（赤塚2008：151、153）。

一方、佟・浅野（2001）は、縫製業33社の技能実習・研修を受ける中国人270名を対象に、講習内でのOFF・JT²にとどまらず、彼／彼女らのトータルな研修・実習——生活過程の中にも注目し、技能実習生の日本語習得の実態とそこでの問題を把握した。その結果の1つとして、来日前後を問わず、技能実習生らの「改善してほしい点」への回答として、「もっと実用的な言葉を教えてほしい」（来日前71.8%、来日後65.9%）という日本語教育・学習に対する要望がもっとも多いと報告している（佟・浅野2001：193-199）。

赤塚（2008）、佟・浅野（2001）のいずれ

の結果からも、技能実習生向けの講習で教えられている日本語と作業現場で用いられている日本語の間に相違点があることが推察される。しかし、具体的にどのような点で相違しているのかということについては明らかにされていない。そうした相違点について明らかにするためには、技能実習生が実習を行っている作業現場に焦点を当て、そこで使われている日本語の特徴を明らかにし、それを技能実習生向けの講習での日本語と比較することが必要不可欠だと思われる。

2.2 話しことばにおける文末表現について

話しことばにおける文末表現に関する研究は、接続助詞（長能1994）、終助詞（許2002、峯2006他）、「裸の文末形式」（上原・福島2004a）、文体（丸山2005）、言いさし・言い切り表現（朴2012）等に関するものが挙げられ、盛んに行われてきたと言える。

その中でも、とくに日本語教育におけるこれらの表現の扱いを見ると、長能（1994）は「のに」「ても」「けれど（も）」「たって」といった4つの逆接の接続助詞を取り上げ、日本語母語話者と日本語学習者の間に、どのような意識・把握の差があるのかについて文末表現との関係で調査を行った。その結果、「のに」「ても」「けれど（も）」をもっと指導すべきで、「たって」は文字化されたものが少ないため、指導に工夫をすべきであると主張している。峯（2006）は、1）聞き手めあての文末表現の習得に授業と言語接触³がそれぞれどのような影響を与えているのか、2）日本語レベルによって、その影響の仕方は異なるのかということ明らかにするため、終助詞等の文末表現に主眼を置き、調査を行った。その結果、授業のほうは下位レベルの学習者への影響が大きい一方、言語接触（のほう）は、上位レベルの学習者に影響が大きく、影響の

仕方は学習者のレベルで異なることが示唆されている。このことから、「教育の現場では、レベルに応じた授業の工夫が望まれる。とくに初級では、単に日本人と会話をさせればよいというわけではなく、言語項目に気づかせるような工夫が必要だ」と峯（2006：272）は指摘している。また、朴（2012）は言いさし・言い切り表現に注目し、いずれも、中国人日本語学習者のJSL（第二言語としての日本語 Japanese as Second Language）とJFL（外国語としての日本語 Japanese as Foreign Language）それぞれ19名、51名、及び日本語母語話者（Japanese native speaker以下JNS）35名を協力対象とし、調査を行った。その結果、全体的使用傾向として、JNSは人間関係の相違に応じた表現形式の使い分けを行っているのに対し、JFL、JSLは人間関係の相違にかかわらず、言いさし表現をより多く選択していたこと、また、JFLは言いさし表現の接続助詞の選択に際して、いくつかの表現を選択するといった「分散型」の傾向がみられることが報告されている。

日本語母語話者のように、人間関係の相違に応じた表現形式を使い分けるために、初級では、単に日本人と会話をさせればよいというわけではなく、言語項目に気づかせるような工夫が必要である（峯2006：272）。このことを達成するためには、まずは、どのような言語項目が学習者にとって必要なかを明らかにしなければならない。日本語初級レベルの技能実習生の場合には、まずは、作業現場で使われている日本語（言語項目）を明らかにした。次に、それと講習用教材とを比べ、相違点を明らかにすることが課題になるだろう。

3 本稿の調査

本稿の目的を達成するために、まずは、どのような文を1発話文と見なすのかという点、ならびに本稿で取り扱う文末表現の項目をあらかじめ特定しておく必要がある。

3.1 文の認定

3.1.1 録音データからの発話文の認定について

自然会話に関する文の認定について、国立国語研究所（1960：2）では「従来の文法論上の文の規定は、具体的な話しことばの処理に際してはじゅうぶんに有力ではない」とされている。メイナード（1993：98）でも「文法上の『文』の定義も定かでない現状では、会話の記述を始めてまず直面したのは、どこでどう区切って記述すればいいかという問題であった。もちろんはっきりと区別できる場合も多くあったが、文なのか文ではないのか判断がつきにくい場合も多かった」とされており、文の認定の難しさは否めない。さて、自然会話をいかに文字化をするのかについて、宇佐美まゆみによって、「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2019年改訂版」（以下「BTSJ」）が開発された。そこでは、「実際の会話の中で発話された文」という意味で、「発話文」という用語が用いられており、「発話文」を「会話という相互作用の中における『文』」と定義している（宇佐美2019：2）。そのうえで、「1発話文」を次のように認定している。

基本的に、ひとりの話者による「文」を成していると捉えられるものを「1発話文」とする。しかし、自然会話では、いわゆる「1語文」や、述部が省略されているもの、あるいは、最後まで言い切

られない「中途終了型発話」など、構造的に「文」が完結していない発話もある。そのような場合は、話者交替や間などを考慮した上で「1発話文」であるか否かを判断する。つまり、「発話文」の認定には、「話者交替」、「間」という2つの要素が重要になる(宇佐美2019:2)。

本稿では、「BTSJ」2019改定版の認定基準に基づき、1発話文の認定を行うこととする。ただし、「BTSJ」では「明日雨だよ。」のような聞き手への働きかけをする実質的な発話であっても、あいづち的な発話であっても、「発話文」として、同様に扱い、区別する記号等はとくにない。本稿の分析対象となるのは、「実質的な発話文」の文末表現に限る。

3.1.2 教科書における文の認定について

教科書における文の認定について、山崎(2011:280)では、「文末は必ずしも句点だけとは限らず、『?』などもその手掛かりになるが、圧倒的に多いのが句点である」とされている。本稿もそれを踏襲し、教科書の各文を分析するにあたっては、「。」の付けられたところを1文と見なし、句点(。)の前に来る語の文末表現を分析対象とした⁴。なお、「はい、ちょっと……」(『外国人技能実習生のための日本語:実習現場編(技能実習生用)』(以下『実習・技』)p75)のように、「。」ではないが、「……」で文の途切れているものに関しては、言いさし文として、1文と見なした。ただし、1)「はい。」(『実習・技』p19)、「いいえ。」(『実習・技』p34)のような応答詞文、2)「森さん。」(『実習・技』p15)のような人名だけで終わる呼びかけ文、3)「あ。」(『実習・技』p59)のような間投詞文、及び4)「『火事です。』と周りの人に知らせてください。」(『実習・技』p52)の「火

事です。」のように、「」に入れられた発言引用文については「。」で終わっていても文として扱わない。また、例外的には、「好きな食べ物……、パスタとか、餃子とかですね。」(『実習・技』p80)のように、「……」が使われていても、「……、」までではなく、「。」までを1文と見なしたものもある。これは、その後の会話内容(「パスタとか、餃子とかですね。」)から「……」は文を終わらせるのではなく、何かを考えているためのポーズとしての機能を果たしていることが推測されたためである。

3.2 文末表現の項目

文末表現は「文末」において「表現者の判断や気持ち」が表される表現であり、「それによって文全体の意味が決定される」(金田一・林・柴田1988:225)。本稿では、1)切れ目、2)スタイル、3)「〇形」、4)縮約表現という4つの項目から、文末表現を考察する。そのうち、

1)切れ目項目については、文の切れ目があるかどうかにより、言いさしと言い切り2分類に分ける。言いさしについては、白川(2009)での言いさしは、「主節を欠いた統語的に不完全な文による発話」を指しており、「内容的には完全な『文』と同等の完結性を持った発話ばかり」(白川2009:1)(下線は本稿筆者による)が対象となっている。白川(2009:7-11)は「言い残し」と「言い終わり」(さらに「言い尽くし」と「関係づけ」)の2種類に分け、前者を「言うべき後件を言わずに途中で終わっている文」と、後者を「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」と定義している。このように、白川(2009)は言いさしを内容的に取り扱っていることがわかる。しかし、内容的に言いさしを取り扱うことは、すでに金(2018:6)が1)「言い

たいことを言い終わっているかどうか」という、「言い残し」と「言い終わり」に分ける分類基準を把握しにくいし、2)「言い残し」について、「何が言い残されているのかははっきりと説明されていない」と指摘しているように、それほど容易ではない。また、白川(2009)では、接続助詞で終わる従属節のみを対象に言いさしを取り扱っており、複合的な接続形式(たとえば、「～なければ」「～ないと」等)や述語省略等についての検討がされていないことは言いさしを検討する上で不十分ではないかと思われる。劉(2016)は、白川(2009)とは異なり、言いさしを形式面から判定し、言いさしを「形式上は未完結でありながら、意味機能が完結しているような従属節のみで終わる発話」(下線は本稿筆者による)であると定義している。また、接続助詞で終わる従属節のみならず、「ねえ、よかったら、話を…。」のような述語省略のもの及び複合的な接続形式も言いさし文として取り扱っている。劉(2006)によると、言い

さは「省略」と「付加」の2種類に分けられる。劉(2016:182)での「省略」は「意味論的な省略」と「語用論的な省略」があり、前者は「なければ(ならない/いけない)」、「ないと(いけない/だめだ)」、「たら/ば(どうですか)」、「たら/ば(よかった/いいのに)」、「たり(する)」、「て(ください)」、「つて/と(言う/思う)」等が挙げられている。本稿は、言いさしの定義について、「文を最後まで言い切らず、途中でやめる表現」とした小池他(2002:6)にならい、言いさしか言い切りかを判別する時、内容面からではなく、劉(2006)と同じく、形式面から判別する。また、劉(2006)が取り扱った接続助詞で終わる従属節、述語省略、複合的な接続形式を踏襲したうえ、断定助動詞「である」が省略された「体言止め」も言いさしとする。本稿ではこうした言いさし以外のもの(表1を参照)は言い切り項目に属するものとする。

2) スタイル項目としては、普通体と丁寧体の2種類を取り上げる。スタイルというと、

表1 文末表現を特定するための項目

項目		判定結果	例
切れ目	言いさし	+	① 接続助詞で終わるもの(例:「～のに…」、「～けど…」、「～が…」、「～から…」、「～し…」、「～て…」、「～たら…」、「～ば…」、等) ② 用言/助動詞の連用形で終わるもの(例:「～ように…」) ③ 述語省略(例:「スピードを…」) ④ 体言止め(例:「繰り返し…」) ⑤ 断定助動詞省略(例:「上手…」) ⑥ その他(例:「～ないと…」、「～なきゃ…」)
	言い切り	-	「言いさし」以外のもの
スタイル	普通体	+	例:動詞「る」形、動詞「た」形、動詞「ない」形等
	丁寧体	-	例:動詞「ます」形等
	その他	—	例:「スピードを…」、「上手上手」等
の形	動詞等の非の形	+	例:「変わらんよ」、「やったんですけど」等
	動詞等のの形	-	例:「教える」、「直す」、「持っていく」等
	その他	—	例:「スピードを…」、「繰り返し…」等
縮約表現	縮約形使用	+	例:「～なくちゃいけん」、「～じゃないといけん」、「～てる」、「～んだ」等
	縮約形非使用	-	例:「～なくてはいけない」、「～ている」、「～のだ/～のです」等
	その他	—	例:「肉がもう…」

もちろん、主文末のスタイルを取り扱うのは一般的だが、本稿では、それに加えて（複文の）主節が省略された場合も、従属節のスタイルを取り扱う対象になる。

3) 「〇形」項目については、動詞等（名詞、動詞、イ形容詞、ナ形容詞）の〇形であるかどうかにより、「動詞等の非〇形」と「動詞等の〇形」2分類に分ける。ここでの「動詞等の〇形」⁵とはメイナード(1993:121)の「裸のダ体」⁶と上原・福島(2004a)の「裸の文末形式」⁷を参考にしたうえで、「日本語の発話においては、動詞等が文末に来る場合、その後終助詞『よ』『ね』や、接続助詞『けど』『が』等のようなほかの要素を伴わず、動詞等の終止形⁸そのままが文末表現になった場合を指す」と定義する。また、メイナード(1993)における「裸のダ体」は普通体のみ取り上げられており、「相手を意識して、相手に受け入れられ易いように形成したものではない」(メイナード1993:123)とされている。メイナード(1993:124)は、「裸」という印象的な語の使用について、「話者が他に向けて形を整える余裕がなく、又は必要性がなく、思考や経験をそのまま表現した『裸』のままの姿のようである」と描写しているが、この指摘は丁寧体の場合にも当てはまるのではないかと思われる。そこで、本稿では、上原・福島(2004a)を参照したうえで、「動詞等の〇形」を取り扱う際、普通体だけでなく、丁寧体も対象とした。

4) 縮約表現項目については、縮約形が用いられたかどうかにより、縮約形使用と縮約形非使用2分類に分ける。ここでの縮約形は斎藤(1991)の定義⁹に従う。

以上をまとめた文末表現を特定するための項目を表1に示す。(表1中の「+」「-」「—」についての詳細は以下の4「分析・考察」項で述べる。)

3.3 分析データの概要

3.3.1 録音データの概要

本稿では、日本の鉄骨工場で実習を行う技能実習生に向けられた日本語母語話者の文末表現の特徴を明らかにする。そのため、工場側と協力者側（当該工場で実習を行う中国人技能実習生8名¹⁰）の許可を得たうえで、協力者たちにICレコーダーを渡し、作業現場の会話録音を依頼した¹¹。

工場側と協力者側の許可を得たプロセスとしては、まずは、本研究の研究目的、研究意義、依頼事などを工場側に日本語で口頭で説明し、工場側からの理解を得たうえで、同じことを中国語で協力者に説明し、理解を得た。次に、正式的な書面資料（「依頼書」（機関向けと協力者向けで異なるもの）、「研究倫理に関する契約書」（左記に同じ））を作成し、工場側と協力者側に録音データの保管、工場情報・協力者の個人情報の扱いなどを説明し、十分に理解を得たうえで、それぞれからの「研究承諾書」を得た。なお、協力者向けの各書面資料はすべて、中国語版を提示した。

録音調査はパイロット調査と本調査に分け、前者は2019年5月17、18日に、後者は2019年10月4日から11月20日まで(約11日間)実施した。両者を合わせた録音時間は計40時間にのぼったが、そのうち、朝礼と送別会・会議等の録音を対象外とした。よって、作業現場の録音としては約36時間のデータとなった。それらを文字化¹²した。文字化データから、日本語母語話者による発話データを抽出し、3.1.1に前述の基準に基づき認定すると、計1086の発話文¹³が得られた。それらの文末表現を分析対象とした。

3.3.2 講習用教科書の概要

法務省によると、技能実習生向けの講習については講習時間と講習内容が定められてい

る¹⁴が、講習用教材はとくに指定されていないため、講習機関によって様々である。国際人材協力機構による『講習の日本語指導ガイド』では、講習で学んだことと作業現場で使う日本語にずれがあつては、効率のよい学習ができないと主張されている。また、日本語の教材は数多くあるが、技能実習生に適したものはまだ少なく、技能実習生が覚えたい表現や言葉が出ていなかったり、逆にあまり必要のない言葉がたくさんつまったりしているものがあるということも指摘されている(国際人材協力機構2016:16)。

本稿では、国際人材協力機構教材センター(2019)の『実習・技』を比較対象とした¹⁵。この教科書は、「実習現場で技能実習をしながら、日本語を学習する技能実習生のためのもの」(『実習・技』:i)と位置付けられていることから、国際人材協力機構が技能実習生向けの、講習における日本語指導のために、開発した権威的(オーセンティック)な教材だと思われる。また、この教科書のレベルについては、用いられている文型が、日本語能力試験(JLPT)のN4相当のものが多いことから、初級後半程度の学習者が使うことが想定されていると考えられる¹⁶。内容上では、「このテキストを使うと、日本語だけでなく、『技能実習生活のルール』、『安全衛生』に関すること、『地域との共生』に必要なことも学ぶことができます」(『実習・技』:i)とされており、実際の現場で活用できるように、機械・金属、建設関係、溶接、食品製造関係、繊維・衣服関係の5職種の会話が掲載されているものである。

『実習・技』は全21課あり、各課は「タイトル」、「基本文型」の提示、「基本文型」の導入練習、「会話」、「課題」といった5つの部分から構成されている。本稿では、各「基本文型」の導入練習、「会話」及び「課題」

の部分进行分析対象とする。「タイトル」は文末表現と関連しないため、取り扱わない。各「基本文型」の「提示」の部分に載っている例文は後項の「導入練習」の部分のと重なっているため、分析対象としない。また、「課題」の部分は、課によって、質問の形式が異なるが、上記の3.1.2項通りに、原則的に「。」の付けられた文があれば、1文と見なし、分析対象とする。その他は、分析対象としない。

4 分析・考察

分析の手順としては、まずは、表1「文末表現を特定するための項目」に基づき、切れ目項目の言いさしと言い切り、スタイル項目の普通体と丁寧体、「〇形」項目の「動詞等の〇形」「動詞等の非〇形」、縮約表現項目の縮約形使用と縮約形非使用それぞれが文字化した録音データ中では何回用いられていたのかを集計し、作業現場における日本語母語話者の文末表現の特徴を明らかにする(4.1項)。次に、教科書について同様の分析を行う(4.2項)。そのうえで、両者(録音データと教科書)の分析結果を対照し、相違点があればそれを明らかにし、講習用教材の問題点を考察する(4.3項)。

分析方法としては、教科書は録音データと同じ分析方法を取ったため、ここでは録音データを例として、説明する。具体的には、表2「録音データの分析例」のように、分析対象の1086発話文の文末表現に着目し、順番通りに番号を付け、分析対象文の文末表現を、1)切れ目項目の場合、言いさしに属するものなら「+」と、言い切りは「-」と記す。2)スタイル項目の場合、普通体なら「+」と、丁寧体なら「-」と、スタイルと関連しないものなら「—」と記す。3)「〇形」項目の場合、「動詞等の非〇形」に属するものなら

表2 録音データの分析例

分析対象		項目			
		切れ目	スタイル	の形	縮約表現
1	やるか。	-	+	+	—
2	やってもらってもいい?	-	+	+	—
3	決まりはないけど。	+	+	+	+

表3 録音データからの分析結果一覧表

項目	切れ目		スタイル			の形			縮約表現			合計
	言いさし	言い切り	普通体	丁寧体	その他	動詞等の非の形	動詞等のの形	その他	縮約形使用	縮約形未使用	その他	
件数	522	564	484	121	481	566	255	265	209	4	873	1086
%	48.1	51.9	80.0	20.0		68.9	31.1		98.1	1.9		100.0

「+」と、「動詞等のの形」¹⁷に属するものなら「-」と、「の形」と関連ないものなら「—」と記す。4) 縮約表現項目の場合、縮約形使用のものなら「+」と、縮約形非使用のものなら「-」と、縮約表現項目と関連ないものなら、「—」と記す。

4.1 録音データから

作業現場の録音データから得られた文末表

現の分析結果は表3の通りである。

以下では具体例を示しながら、各項目の分析結果を説明する。

1) 切れ目項目

表4中の日本語母語話者(J3)の「発話内容」には、言いさし表現(「_____」部)も、言い切り表現(「~~~~~」部)も含まれる。前

表4 録音データからの発話例1

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	C1	A ¹⁸ さん、おはようございます。
2	2	*	J3	おはようございます。
3	3	*	C1	外、仕事ある?。
4	4	*	J3	<u>たくさん</u> …。
5	5	*	J3	自分なんか、ちょっとおかしい、違うっていうふうにゆったって、 <u>訂正が</u> …。
6	6	*	C1	あ、そう。
7	7	*	C1	全部、全部、ここ?。
8	8	*	C1	外?。
9	9	*	J3	あああ、 <u>30度ある</u> 。
10	10	*	C1	30度?。
11	11	*	J3	気温、 <u>レベル下がり</u> …。
12	12	*	J3	<u>調整とれるんだし</u> 。

(録音文字化資料 抜粋 2019年10月18日)

(「話者」列のJは日本語母語話者で、Cは中国人技能実習生である。以下同様)

者の例としては、述語が省略されている「たくさん…。」「訂正が…。」、接続助詞「し」で終わる「とれるんだし。」「体言止め」の「レベル下がり」があり、後者の例としては、動詞述語文「ある。」が見られる。

さて、作業現場の発話では、言いさしと言いきりどちらが多いかという、録音データから得られた1086発話文の分析結果(表3)を見ると、言いさし文の使用率は48.1%(522発話文)あるのに対し、言いきり文のは51.9%(564発話文)と、使用率がやや高いが、両者にはそれほどほどの差異が見られない。

2) スタイル項目

表5中の日本語母語話者(J3)の発話文は6文である。そのうち、スタイルと関連がない3文(「発話文番号」3、5、8)を除いた、残りの3文(「発話文番号」1、4、6)には、普通体(「_____」部)で終わっている文は2文あり、他の1文は丁寧体(「~~~~~」部)で終わっている。このように、普通体と丁寧体が混在され、使われている場合がある。

さて、作業現場の発話では、普通体と丁寧体どちらを基調として、使われているのかという、1086発話文から、スタイルと関連がない481文を除いた、残りの605文のうち、普通体の使用率は80.0%(484件)を占め、そ

れは丁寧体(使用文121文、使用率20.0%)の4倍にのぼる。鉄骨工場という現場の特性からその原因を考察すると、本稿の1項の「はじめに」で述べたように、鉄骨工場における作業現場が危険性等を伴う場所であるため、人間関係等を配慮するより、コミュニケーション(意思伝達)の経済性を優先的に配慮した結果なのではないかと思われる。ここでの「コミュニケーションの経済性」は、音声による情報伝達の場合、最小限の時間内で情報伝達の実効性をアップさせるため、音声コストをできるだけ縮小することを指すと定義する。鉄骨工場のこのような特性は「〇形」項目の分析結果にもうかがえる。

3) 「〇形」項目

表6で、日本語母語話者(J1)の「発話内容」を見ると、4発話文(「発話文番号」1、3、4、5)のうち、「動詞等の非〇形」(「_____」部)は3文ある。それに対し、「動詞等の〇形」は1文しかない。

さて、作業現場のデータ全体を見ると、1086発話文から、「〇形」と関連がない265文を除いた、残りの821文のうち、「動詞等の非〇形」の使用率は68.9%(566文)あり、過半数を占めていることがうかがえる。それは、日本語会話の中で「動詞等の〇形」を使

表5 録音データからの発話例2

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	J3	ははは<笑い>、C1さん [↑]、これ、 <u>わかる?</u> 。
2	2	*	C1	ああ、わかる。
3	3	*	J3	これ、これ、全部OK。
4	4	*	J3	これも、 <u>こうする</u> 。
5	5	*	J3	これ、終わり。
6	6	*	J3	これ、試験には <u>困ります</u> 。
7	7	*	C1	同じ?。
8	8	*	J3	同じ同じ。

(録音文字化資料 抜粋 2019年10月20日)

表6 録音データからの発話例3

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	J1	熱い <u>よ</u> 。
2	2-1	/	C1	大丈夫、こう、
3	2-2	*	C1	ちょっと向こう。
4	3	*	J1	大丈夫じゃない <u>よ</u> 。
5	4	*	J1	ちょっとごめん <u>な</u> 。
6	5	*	J1	##を <u>もらってくる</u> 。

(録音文字化資料 抜粋 2019年5月18日)

うことが好まれず、話者はその使用を避けるために、対人関係を表現する言語表現を付け加えたからである(メイナード1993:124)。他方、「動詞等の〇形」の使用率が31.1%(255文)あり、メイナード(1993)のデータ(11.98%)¹⁹より3倍近く高いが、これはメイナード(1993)では普通体のみが取り上げられているのに対し、本稿では丁寧体も対象としたため、その違いを反映しているのではないかと思われる。一方、上述のスタイル項目の普通体が多用されているのと同じ理由を持っている可能性も考えられるだろう。すなわち、本調査のデータはメイナード(1993)のデータ(日常会話)とは異なり、危険性を伴う鉄骨工場でのものであるため、メイナード(1993:123-124)で指摘されているように、話者が聞き手に向けて、形を整える余裕がなく、または必要性がないため、思考や経験を「裸」のままに表現したからではないかとい

う推測である。

4) 縮約表現項目

表7で、「 」部に注目すると、J4が「～かもしれん。」という形を取っている。「～かもしれん」は「～かもしれない」からのもので、「ん」が「ない」の縮約形である²⁰。

作業現場のデータ全体における縮約形の使用率についてまとめる。1086発話文から、縮約表現と関連がない873文を除いた、残りの213文のうち、98.1%にのぼる209文で縮約形が用いられていたのに対し、相応の縮約形があるにもかかわらず、用いていない文は、1.9%(4文)にとどまっていた。すなわち、相応の縮約形があるものなら、日本語母語話者はほとんどの場合にそれを用いる。したがって、技能実習生が作業現場で日本語母語話者と会話するなら、必ず縮約形に触れることになると言えるだろう。

表7 録音データからの発話例4

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1-1	/	C1	ちよ、ちょっと下、要不? 要不?、沈黙3秒/(「要不」は中国語で「要る」「必要」という意味である。)
2	1-2	*	C1	必要?。
3	2	*	J4	ある <u>かもしれん</u> 。
4	3	*	J4	要らない。
5	4	*	C1	お、OK、OK。

(録音文字化資料 抜粋 2019年10月18日)

以上をまとめると、鉄骨工場における日本語話者の文末表現の特徴として、1) 言いさしより、言い切りのほうが使用率は高いが、それほどの差異はないこと、2) 普通体が基調として使われていること、3) 用言の終止形そのままではなく、後に何かの要素を伴って文末表現になる場合が多いこと、4) 相応の縮約形があるものについては、縮約形を使うのが一般的であることが挙げられる。

4.2 教科書から

3の3.1.2項の通りに、教科書『実習・技』における文を認定し、得られた計2022文を分析対象とした。分析結果を表8に示す。

1) 切れ目項目

2022文のうち、言いさし文は64文 (3.2%) あり、わずかであるのに対し、言い切り文が1958文 (96.8%) にのぼり、主導的な地位を占めている。

2) スタイル項目

2022文から、スタイルと関連がない66文を除いた、残りの1956文のうち、普通体の使用文はわずか13文 (0.7%) にとどまっている。残りの1943文 (99.3%) はすべて丁寧体が使われており、丁寧体が『実習・技』の主基調になっていることがうかがえる。

3) 「〇形」項目

2022文から、「〇形」と関連がない54文を除いた、残りの1968文のうち、「動詞等の非〇形」の使用文は1081文 (54.9%) であったのに対し、「動詞等の〇形」の使用文は887文 (45.1%) であった。

4) 縮約表現項目

2022文から、縮約表現と関連がない1953文を除いた、残りの69文のうち、縮約形が使われている文はわずか9文 (13.0%) にとどまる。残りの60文 (87.0%) は相応の縮約形があるにもかかわらず、使用されていない。

以上をまとめると、教科書『実習・技』における文の文末表現の特徴として、1) 言いさしの使用文はごく少なく、言い切りは主導的な地位を占めていること、2) 普通体の使用文はごく少なく、丁寧体が主基調となっていること、3) 「動詞等の〇形」の使用文は半数近く占めていること、4) 相応の縮約形があるにもかかわらず、ほとんどの場合、取り扱われていないことが挙げられる。

4.3 録音データと教科書との比較

4.3.1 分析結果からの比較

上記録音データ (4.1項) の分析結果と上記教科書『実習・技』 (4.2項) の分析結果を表9に示す。両者 (録音データと教科書) の使用率欄 (%欄) の差異に注目する。

表8 教科書からの分析結果一覧表

項目	切れ目		スタイル			〇形			縮約表現			合計
	言いさし	言い切り	普通体	丁寧体	その他	動詞等の非〇形	動詞等の〇形	その他	縮約形使用	縮約形未使用	その他	
件数	64	1958	13	1943	66	1081	887	54	9	60	1953	2022
%	3.2	96.8	0.7	99.3		54.9	45.1		13.0	87.0		100.0

表9 録音データと教科書との比較

比較対象	項目	切れ目		スタイル			の形			縮約表現			合計
		言いさし	言い切り	普通体	丁寧体	その他	動詞等の非の形	動詞等のの形	その他	縮約形使用	縮約形未使用	その他	
録音データ	件数	522	564	484	121	481	566	255	265	209	4	873	1086
	%	48.1	51.9	80.0	20.0		68.9	31.1		98.1	1.9		100.0
教科書	件数	64	1958	13	1943	66	1081	887	54	9	60	1953	2022
	%	3.2	96.8	0.7	99.3		54.9	45.1		13.0	87.0		100.0

1) 切れ目項目

言いさしは、録音データでは48.1%にのぼり、半数近くあるのに対し、教科書では3.2%にとどまっていた。言い切りは、録音データでは51.9%であるのに対し、教科書では96.8%にのぼった。すなわち、作業現場における発話では、言いさし文より言い切り文のほうが使用率はやや高いがそれほどの差異は見られない。他方、教科書では、言いさし文の使用はわずかで、言い切り文のほうが圧倒的な地位を占めていると言える。

2) スタイル項目

普通体は、録音データでは80%にのぼったのに対し、教科書では0.7%にとどまっていた。丁寧体は、録音データでは20%にとどまっていたのに対し、教科書では99.3%にのぼった。すなわち、作業現場における発話では、普通体が基調となっているのに対し、教科書では、丁寧体が基調となっている。

3) 「の形」項目

「動詞等のの形」は、録音データでは31.1%あり、3分の1に足りないのに対し、教科書では45.1%あり、半数近くを占めている。「動詞等の非の形」は、録音データでは

68.9%にのぼり、3分の2を超えているのに対し、教科書では54.9%あり、半数である。

4) 縮約表現項目

縮約形使用は、録音データでは98.1%にのぼったのに対し、教科書では13.0%にとどまっていた。縮約形非使用は、録音データでは1.9%にとどまっていたのに対し、教科書では87.0%にのぼった。すなわち、作業現場における発話では、相応の縮約形があるものについては、縮約形が用いられるのは一般的であるが、教科書では、相応の縮約形がある場合にも、それが取り扱われていないのがほとんどである。

以上をまとめると、録音データと教科書における文末表現の特徴の比較結果として、1) 作業現場における発話には、言いさしが半数近くあり、よく使われているのに対し、講習用教材(『実習・技』)では、言い切りが主導的な地位を占めていること、2) 作業現場では、普通体を主基調として、発話が進められているのに対し、講習用教材では、丁寧体を主使用文体としていること、3) 作業現場では、「動詞等のの形」の使用率は3分の1に足りないのに対し、講習用教材で

は「動詞等の〇形」の使用率は半数近くあること、4) 作業現場では、相応の縮約形があるものについては、縮約形が使われるのは一般的であるのに対し、講習用教材では、相応の縮約形がある場合にも、それが取り扱われていないのがほとんどであることが挙げられる。

4.3.2 具体例からの比較

以下では、録音データからの具体例（表10）を出しながら、それを上述の講習用教材（『実習・技』）の特徴通りに変形した会話例を示す（「講習用教科書」列）。これにより、作業現場における日本語と講習における日本語の相違点をさらに詳細に見てみたい。

表10は作業現場で働く日本語母語話者2人と中国人技能実習生1人ととのやりとりを示した発話データである。日本語母語話者の発話に注目する。

1) 切れ目項目

この発話データ（表10）では言いさし文が

2種類使われている。1つは断定助動詞「だ／です」が省略された「～OK。」（「発話文番号」11）である。もう1つは命令・請求の機能を果たす文型「～てください」の「ください」が省略された「～炙ってよ。」（「発話文番号」14）である。表1に示したように、実際の作業現場の発話には何種類もの言いさし文が使われている。また、4.1項の分析結果通りに、言いさし文の使用率が半数近く（48.1%）ある。すなわち、作業現場の発話の半数近くは、文として形式上で未完結のまま、そのターンを終了すると言える。それは、日本文化のような「高コンテキスト文化」（たとえば、福井1986、藤本2011）の影響下で育てられてきた日本語母語話者が、多くも語らなくても、「空気を読む」「察する」ことで意思疎通できたり、言いさし表現でFTA（Face Threatening Acts、フェイスを脅かす行為）を緩和したりすることができる（生田1997）からである。しかし、講習では、おおむね「～OK。」ではなく、「～OKです。」「～炙ってよ。」とは言わず、「～炙ってください

表10 録音データと教科書の対比例

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	講習用教科書（『実習・技』）
1	1	*	J1	何 <u>やってん</u> の？[↑]、こんなの ²¹ 。／沈黙2秒／	やっているんですか。
2	2	*	J1	<u>逆</u> に行っちゃうよ。	行ってしまいますよ。
3	3	*	J1	<u>逆</u> じゃない？。	逆じゃないですか。
4	4	*	J2	これ <u>逆</u> だ。	逆です。
5	5	*	J2	<u>間違</u> ってる。	間違っています。
6	6	*	J2	これ <u>違</u> う。	違います。
7	7	*	J2	これ <u>違</u> ってる。	違っています。
8	8	*	C1	うん？[↑]。	
9	9	*	J2	いや、これ <u>反対</u> だ。	反対です。
10	10	*	J2	<u>わか</u> る？。	わかりますか。
11	11	*	J2	これ <u>OK</u> 。	OKです。
12	12	*	J2	これ <u>違</u> う。	違います。
13	13	*	C1	これ <u>違</u> う？[↑]。	
14	14	*	J2	Yくん、いったん、これ <u>炙</u> ってよ。	炙ってくださいよ。

（録音文字化資料 抜粋 2019年10月24日）

よ。」の形で、教わっていることが4.2項に分析した講習用教材から推察される。今回の分析対象データから典型的な例を挙げると、「わかってくれば、スピードを……」のように、日本語母語話者は発話を中止して、ターンを渡したつもりでいるのに対し、中国人技能実習生は発話の続きがまだであると判断し、その場ですぐ反応できず、戸惑ったケースが少なくない。

要するに、講習でほとんどの場合に、言い切り表現を教わっていたため、それになれた技能実習生が作業現場で日本語母語話者とコミュニケーションする際、日本語母語話者間での「察し」のコミュニケーションスタイルができないが故に、支障が出てくることありうる。

2) スタイル項目

芳賀（1962）は主文末においては、丁寧体を基調とする談話は、一貫して丁寧体を使うべきとし、逆に、普通体を基調とする談話は一貫して普通体を使用するのが普通であると述べている。スタイル項目においては、講習用教材は作業現場における発話の文末表現特徴から、かなり相違している（4.3.1項の2）及び表9のスタイル項目の%欄）。ここで動詞「違う」の肯定形を例として説明すると、講習で教わっているのは「違います」（丁寧形）である。そのため、それになれた技能実習生が作業現場に立つと、耳に「ちがう」（普通形）が入って、「これちがう？」（「発話文番号」13）と呟く。実はそれには「これは間違っているのですか」と確認しているという可能性だけでなく、「『これちがう』はどういう意味だろう」と呟いているということもありうるだろう。しかし、日本語母語話者はそこまで察することができず、技能実習生が「ここは間違っているのですか」と確認している

と解釈してしまう可能性があるだろう。その結果、双方の意思疎通がうまくいっていないことに、日本語母語話者のほうが気づかないという状況が起こりうる。

要するに、講習で、丁寧体を基調として教えられているため、それになれた技能実習生が普通体を基調とする作業現場の発話に接触する際、意思疎通がうまくいかなかったり、誤解を生じたりすることがありうると考えられる。

3) 「〇形」項目

「〇形」使用率は、4項目中、録音データと『実習・技』との数値がもっとも近い（表9）。とはいえ、それでも、前者では31.3%であるのに対し、後者では45.1%と、その差異は約15%にのぼる。また、表10を見ると、「やってんの？」（「発話文番号」1）のような、（言い切り文の文末に来る）終助詞「の」の使用については、録音データでは564文（言い切り文）のうち、15文（2.0%）あるのに対し、『実習・技』では1ヵ所も見られない。これは前述（4.2項2）及び4.3項2）したように、『実習・技』では、「やっているのですか。」（「やっているんですか。」）のような丁寧体が基調となっているためである。また、「行っちゃよよ。」（「発話文番号」2）、「炙ってよ。」（「発話文番号」14）の（言い切り文の文末に来る）終助詞「よ」の使用については、録音データでは564文のうち、81文（14.3%）があるのに対し、『実習・技』では1958文のうち、46文（2.3%）にとどまっていた。日本人会話の中で「動詞等の〇形」を使うことが好まれず、話者はその使用を避けるために、対人関係を表現する言語表現を付け加えるのは一般的である（メイナード1993：124）。したがって、日本人会話の表現に近づけるために、技能実習生向けの講習用教材では「動詞等の非

の形」に関する表現がさらに導入されるべきだと望まれる。

4) 縮約表現項目

表9の両データの縮約表現項目について比べると、4項目中、両者の差異がもっとも大きいと言える。また、表10を見ると、この発話には、「やってんの」「行っちゃうよ」「逆じゃない?」「間違ってる」「違ってるといった5カ所が縮約形が使われており、しかも、そのうちの「ちゃ／じゃ」「てる」は呉(2016)における「話しことばに縮約形の使用率がもっとも高い5項目」²²⁾に属す。これほどの使用率があるにもかかわらず、『実習・技』では、縮約表現と関連がある69文のうち、「ちゃ」「てる」の使用は0文である。かろうじて「じゃ」の使用は13文(18.8%)にのぼる。呉(2016)は縮約形を含んだ自然な日本語の話しことばになれていないことで、コミュニケーションがうまくいかなかったり、相手の言う内容を聞き取れなかったりする人が少なくないと推測している。ならば、講習で、元の形そのままを教えるだけでなく、相応の縮約形も導入することが必要ではなからうか。

以上のように、文末表現に注目し、切れ目、スタイル、「の形」、縮約表現といった4つの項目から、作業現場で使われている日本語と講習で教わっている日本語との相違点を明らかにした。今後、講習で、たとえば、表10のようなものをどのように導入し、教えたら、技能実習生にとって、もっと実用的な講習となるのかということについて工夫が望まれる。

5 結論と今後の課題

技能実習生向けの講習で教えられている日

本語と作業現場で使われている日本語との間の相違点を明らかにするためには、実習が行われている作業現場で使われている日本語そのものに注目し、講習で教えられている日本語と比較することが必要不可欠だと思われる。

その第一歩として、本稿は鉄骨工場における日本語母語話者の発話の文末表現に焦点を当て、分析によって明らかになった特徴と技能実習生向け講習用教材『実習・技』との比較を通し、両者の、文末表現上の相違点を明らかにした。総括すると、1) 作業現場における発話には、言いさしが半数近くあり、よく使われていると言えるのに対し、講習用教材では、言い切りが主導的な地位を占めていること、2) 作業現場では、普通体を主基調として、発話が進められているのに対し、講習用教材では、丁寧体を主使用文体としていること、3) 作業現場では、「動詞等のの形」の使用率は3分の1に足りないのに対し、講習用教材では「動詞等のの形」の使用率は半数近くあること、4) 作業現場では、相応の縮約形があるものについては、縮約形を使うのが一般的であるのに対し、講習用教材では、ほとんどの場合に、相応の縮約形があったとしても、元の形そのまま使われていることが明らかになった。このような状況を踏まえ、今後、講習で鉄骨工場のような指示が多い作業現場における日本語母語話者の発話の文末表現をどのように導入し、教えたらいいのかについて、工夫が必要であると思われる。

なお、本稿では、切れ目、スタイル、「の形」、と縮約表現の4つの項目それぞれから鉄骨工場における日本語母語話者の文末表現の特徴を検討したが、この4つの項目がお互いにどのような対応関係を持っているのかということについては、考察していない。また、本稿では、スタイル項目について、作業現場

では普通体がよく使われているのに対し、教科書では丁寧体が主に取り扱われていることを明らかにしたが、技能実習生にとって、労働者として作業現場で「聞く」際には普通体が大切である一方、日本の生活者として「話す」際には丁寧体を期待されている可能性がある。このことを踏まえつつ、講習で、丁寧

体と普通体をどのように取り扱っていくのかということが課題になるだろう。また、本稿では、作業現場で丁寧体が使われている場合は、その丁寧体使用がどのような機能を果たしているのかということについても踏み込んでいない。今後、これらの点も研究視野に入れ、検討したい。

注

- ¹ ここで、フィリピンの場合は、英語を指す。
- ² 倭・浅野 (2001: 187) では O F F・J T (off the job training) は「教室での講習、あるいは、せいぜい教室でのカリキュラムの一環としての地域の日本人との交流」だとされている。
- ³ 峯 (2006: 266) では言語接触は「学習者に直接向けられた発話だけでなく、テレビや、学習者の周りでの日本人同士の会話など、学習者が耳にしうるもの全てを含める」だとされている。
- ⁴ 本稿での比較対象とした教材 (『外国人技能実習生のための日本語: 実習現場編 (技能実習生用)』) には句読点「？」は用いられていないため、「？」については述べない。
- ⁵ ここでの「動詞等の〇形」については、メイナード (1993) では「裸のダ体」と、上原・福島 (2004a) では「裸の文末形式」と名付けられている。本稿では、これらを参照にしたうえで、本稿の録音データから得た1086発話文のうち、出現数のもっとも多い動詞を代表として名称に含め、「動詞等の〇形」と名付けた。
- ⁶ メイナード (1993: 121) は用言の終止形が他の要素を伴わないでそのまま文末表現になった場合を「裸のダ体」と呼んでいる。
- ⁷ 上原・福島 (2004a: 110) は、日本語の発話においては、文末に終助詞「よ」「ね」や接続助詞「けど」「が」などが多く用いられ、それらを伴わない文末形式を「裸の文末形式」と呼んでいる。
- ⁸ ここでの「動詞等の終止形」は名詞、動詞、イ形容詞、ナ形容詞の現在形と過去形及び現在形と過去形の肯定形と否定形を指すものとする。なお、本稿では、「動詞等の〇形」を取り上げる際、普通体だけでなく、丁寧体も対象とするため、丁寧体の各形式も「動詞等の〇形」に入れる。たとえば、動詞「狙う」を例として、本稿で、取り扱う「〇形」は「狙う」「狙った」「狙わない」「狙わなかった」「狙います」「狙いました」「狙いません」「狙わないです」「狙いませんでした」「狙

わなかったです」がある。

なお、本稿では、以上のような過去形の「～た」、否定形の「～ない」、丁寧形の「です・ます」を除外した他の「動詞+助動詞」(例えば、推量を表す「だろう、でしょう」)をメイナード (1993) と一致させ、「動詞等の非〇形」に分類した。

- ⁹ 齊藤 (1991: 92) では、縮約形については、「現代日本語において、同一と認められる語 (句) が異なった複数の音形を持って現れるとき、その音形間の関係において次のいずれかの音声的過程が認められた場合、その認められたほうの形を『縮約形』と呼ぶ」と定義されている。齊藤の挙げる音声的過程は次の3つである。
 - a. 音節数の減少 (音節の脱落・融合) 例: けれども→けど、では→じゃ
 - b. 音数の減少 (単音の脱落) 例: monoda → monda
 - c. 音量の減少 (音の長さの短縮) 例: honto: → honto
- ¹⁰ 本研究を行った研究者自身の言語能力上の制限により、技能実習生の出身国上位3か国 (ベトナム、中国、フィリピン) のうち、中国人技能実習生のみが実習する鉄骨工場に、協力を依頼した。
- ¹¹ 本研究では、技能実習生に向けられた日本語母語話者の文末表現の特徴を明らかにするにあたって、日本語母語話者ではなく、技能実習生にICレコーダーを渡し、録音を依頼した。それは、日本語母語話者にICレコーダーを渡し、録音を依頼した場合には、日本人の同僚間の話が増えることが想定されたからである。そうすると、録音されたデータの中でどの部分が技能実習生にとって、実用的なのかを判断しにくくなる恐れがあった。なお、文字化資料では、技能実習生の他に、日本人の同僚が2人以上参加する会話場面も見られた。会話内容はすべて技能実習生に、あるいは技能実習生が従事している作業に関連する話であったため、それも分析対

象とした。

¹² 文字化のルールは原則的に、宇佐美 (2019) の「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2019 年改訂版」をベースとして、多少の変更を加えた。

。	文末 (文の終わりにつける)
?	疑問
、	文の区切り
..	0.5秒以下のポーズ
…	0.5秒のポーズ
/沈黙/	0.5秒以上を数値で示す
<笑い>	笑い
##	聞き取り不能 (モーラ数)
[↑]	上昇イントネーション
[↓]	下降イントネーション
[→]	自然下降イントネーション
[]	文脈情報の補足
=	音声の引き伸ばし

¹³ 36時間の録音データから抽出された日本語母語話者の発話は1086発話文のみである。あまりにも少ないと思いがちであるが鉄骨工場の作業現場だからこそ、おしゃべりが少ない、しかも、作業中の雑音が入っているのも特徴である。そのため、聞き取りにくい部分もあることは否めない。

¹⁴ 詳細は法務省入国管理局 (2009) 「技能実習生の入国・在留管理に関する指針」を参照のこと。

¹⁵ 今回の録音協力者たちは講習では『実習・技』を使わなかった。

¹⁶ 『実習・技』ではレベルに関して、明確に触れられていないが、本稿筆者は『新装版 どうなときどう使う 日本語表現文型辞典』(友松・宮本・和栗2010) を参照に、JLPT(日本語能力試験)のレベルと照らし合わせた。この教科書(『実習・技』)で用いられている文型が、N4相当のものももっとも多かった。そのため、初級後半程度の学習者が使うものだと推定したのである。

¹⁷ 本稿では、文字おこししたもの(字面)通りに、本稿の表1の各項目各分類と対照し、分析を行う。分析する際、イントネーションを分析要素には入れないがそれは本稿では、形式上から文末表現を取り扱うからである。たとえば、「まんりき、足りる?」の場合、イントネーションが上がっているのに、その後終助詞「か」が省略されたことが推測できるが分析するとき、「動詞等の形」に属させた。

¹⁸ ここでは、個人の情報を漏らさないように、名字の代わりに「A」と表示する。

¹⁹ メイナード (1993) は日米における大学生の日常会話をデータとし、会話の言葉の特徴に関し

て、対照分析を行った。そのうち、日本語データ20組の合計60分で、総計1244文の文末表現の種類別使用率に関する分析がある。ここでは、終助詞の使用頻度が高くなる(使用文436文使用率35.05%) こと等が報告されている。また、文が用言の終止形そのもので終わることがごく少なく、「裸のダ体」は全体の11.98%に過ぎなかったという。

²⁰ 呉 (2016: 103) で指摘されているように、「人の会話の録音やロールプレイを行っても、分析したい表現が出てこない場合」もある。そのため、例えば、土岐 (1975) は、「では→じゃ」「ている→てる」「わからない→わかんない」などを、堀口 (1989) は、「のです→んです」「ている→てる」「ておく→とく」「てしまう→ちゃう」などを、川瀬 (1992) は、「では→じゃ」「なくて→なきゃ」「ている→てる」「と聞いた/と言った/と言っていた→って」などを、上原・福島 (2004b) は、「のだ→んだ」「ている→てる」「てしまう→ちゃう」「では→じゃ」などを取り上げているように、従来の先行研究は日常会話でよく使われている、代表的な縮約表現を取り扱っていることが多いと言える。同時に、日本語における縮約表現の全貌を取り上げた先行研究は管見の限り、まだ見当たらない。

本稿の使用データには「かもしれん。」「分からん。」「終わらん。」「変わらんよ。」「残らんよ。」「被らんよ。」「止まらん。」「あげないといけん。」「掛けていけん。」「抜いていけんや。」などのように、「ない」を「ん」にした例は多くはないが、1086発話文のうち、12回出た。

これらのようなものは何かのグループに分類できると思っている。しかし、いったいどのグループに分類したらいいのかを分析した際、確かに迷った。結局、本稿では、「かもしれん」のように、「ない」から「ん」に変形されたものについて、「ん」を「ない」の縮約形と見なした。それは、こうした文脈での「ん」(n) は、「ない」(nai) から母音「a」「i」が脱落したもので、つまり齋藤 (1991: 92) が挙げる音声的過程の「b.音数の減少」に相当するものと判断したからである。また、呉 (2016: 106-107⑥、109表2⑥) における「母音の脱落」にも、「ん」は「ない」からの縮約形とされている。

²¹ この文の文末表現として、「やってんの」を取り扱ったのは、作業現場の録音データから、「何やってんの? こんな。」を倒置文と判断し、J1が言いたかったのは「こんなことして、何をやってるんですか」であると推測したからである。

²² 呉 (2016) は、ドラマシナリオと日本語能力試

験を対象に、それぞれ2042例と1711例を分析し、調査を行った。その結果、「んです」「てる」「って」「ちゃ／じゃ」「けど」といった5項目は縮約形の使用頻度が高くと高く、しかも、両データ（ドラマシナリオと日本語能力試験）にはその結果が共通しているとされている。そこから、日常会話における縮約形の使用頻度も推測することが可能だと呉（2016）は考えている。

参考文献

- 赤塚恵子（2008）「技術研修生日本語指導における実践の構造化をめざして——日本語学校と受け入れ企業の日本語指導評価の視点に対する意識のずれから、日本語学習のあり方を探る（2）——A社における技術研修生の日本語学習の結果を通して」『鈴鹿国際大学紀要』第15巻 pp.149-161
- 飯田朋子（2020）「技能実習生と日本語母語話者のコミュニケーションにおける課題——『わかりやすさ』のすれ違いと教育変革の必要性——」『日本語政策学会 第22回研究大会（予稿集）』 pp.32-34
- 生田少子（1997）「ボライトネスの理論」『言語』第26巻第6号 pp.66-71大修館書店
- 池田裕（1995）「文末表現の重要性」『月刊言語』第24巻第13号 pp.128-129
- 上原聡・福島悦子（2004a）「自然談話における『裸の文末形式』の機能と用法」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第14巻 pp.109-123
- 上原聡・福島悦子（2004b）「やっぱ丁寧に話しちゃいますんで：丁寧体の会話における縮約形とくだけた表現の使用」『Fourth International Conference on Practical Linguistics of Japanese (CONFERENCE HANDBOOK)』 pp.42-43
- 宇佐美まゆみ（2019）「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2019年改訂版」
< <https://ninjal-usamilab.info/lab/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf> >（最終参照2020-10-07）
- 川瀬生郎（1992）「縮約表現と縮約形の文法」『東京大学留学生センター紀要』第2号 pp.1-24
- 外国人技能実習生問題弁護士連絡会（2018）『外国人技能実習生法的支援マニュアル 今後の外国人労働者受入れ制度と人権侵害の回復』明石書店
- 金璋婷（2018）「接続助詞による言いさし表現の分類について」『言語と文化』第30巻 pp.1-30
- 金田一春彦・林大・柴田武（1988）『日本語百科大事典』大修館書店
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也（2002）『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 国際人材協力機構（2016）「講習の日本語指導ガイド」
< https://www.jitco.or.jp/download/data/nihongo_shido.pdf#search >（最終参照2020-10-07）
- 国際人材協力機構（2019）『外国人技能実習生のための日本語——実習現場編——（技能実習生用）』国際人材協力機構 教材センター
- 国立国語研究所（1960）『話しことばの文型（1）——対話資料による研究——』秀英出
- 呉岳樺（2016）「話しことばにおける縮約形に関する研究——ドラマと日本語能力試験の考察を中心に——」『日本語教育研究』第62巻 pp.100-116
- 斎藤純男（1991）「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』第6巻 pp.89-97
- 白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 多賀谷一照（2016）『実務裁判例 出入国管理及び難民認定法』日本加除出版
- 土岐哲（1975）「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』第28号 pp.55-66
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2010）『新装版 どんなどきどう使う 日本語表現文型辞典』アルク
- 修岩・浅野慎一（2001）「縫製業の中国人技能実習生・研修生における日本語習得と社会的諸関係に関する実証的研究（1）」『神戸大学発達科学部研究紀要』第8巻第2号pp.183-210
- 中西泰洋（1992）「日中表現法の対照的考察——文末詞と語気助詞について（I）——」『日本語・日本文化』第18巻 pp.99-123
- 長能宏子（1994）「日本人と日本語学習者による接続助詞ノニ・テモ・ケレド（モ）・タツテの把握の違いの調査報告：効果的指導に向けて」『日本語教育方法研究会誌』第1巻第2号 pp.26-27
- 芳賀綏（1962）『国語表現教室』東京堂
- 馬穎瑞（2014）「疑問文の文末表現の使用に関する一考察」『研究論集 北海道大学文化研究科』第14巻 pp.173（左）-186（左）
- 許夏玲（2002）「話し言葉における文末表現と終助詞『ネ』『ヨ』の共起関係——『ネ』『ヨ』

- が付かない文末表現を中心に——』『言葉と文化』第3巻 pp.111-126
- 28 福井有 (1986) 「文化のコンテクスト度について」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院研究集録』第6巻 pp.118-128
- 29 藤原与一 (1982) 『方言文末詞<文末助詞>の研究 (上)』春陽堂書店
- 30 藤本久司 (2011) 「文化の類型とコミュニケーションギャップ」『人文論叢 (三重大学)』第28巻 pp.145-155
- 31 法務省 (2016) 「技能実習制度の現状」<01-02 技能実習の現状 (実習生数・職種別推移・国別数) (mhlw.go.jp)> (最終参照2020-12-10)
- 32 法務省 (2017) 「新たな外国人技能実習制度について」
<<http://www.moj.go.jp/content/001288472.pdf>> (最終参照2020-10-07)
- 33 法務省入国管理局 (2009) 「技能実習生の入国・在留管理に関する指針」
<<file:///C:/Users/zhang/Desktop/技能実習生の入国・在留管理に関する指針.pdf>> (最終参照2020-10-07)
- 34 堀口純子 (1989) 「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文芸言語研究 言語編』第15号 pp.99-121
- 35 朴仙花 (2012) 「中国人日本語学習者による文末表現の使用に関する考察: 断り発話を事例として」『言葉と文化』第13巻 pp.95-114
- 36 丸山岳彦 (2005) 「話し言葉に現れる文末表現の分類と文体的指標」『言語処理学会 第11回年次大会 発表論文集』 pp.751-754
- 37 水谷信子 (2001) 『続日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 38 峯布由紀 (2006) 「第二言語習得における『授業』と『言語接触』の影響についての考察——日本語文末表現の使用に関する内省アンケート調査をもとに——」『人間文化論叢』第9巻 pp.265-275
- 39 メイナード, 泉子・K (1993) 『日英語対象研究シリーズ (2) 会話分析』くろしお出版
- 40 山崎誠 (2011) 「文末表現の分布と文体——『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して」『Japio YEARBOOK』 pp.280-283
- 41 劉曉萃 (2016) 「意味論的な省略による言いさし文」『研究論集 北海道大学文化研究科』第15巻 pp.179 (左)-194 (左)